

# 太宰府の文化財

406

## 土製仏像 原遺跡第22次調査出土 中世 三条一丁目

太宰府天満宮の西側にある浦之城橋を渡って四王寺山に向かう途中、連歌屋から三条一带に中世の寺院跡である原遺跡が広がっています。ここにはかつて、「原山」とよばれる山寺がありました。寺は通称「原八坊」と呼ばれており、八坊のほか本堂、中堂、宝塔院などが建っていたとされています。このうち、本堂が建っていたと推定される場所の一部で平成27年に発掘調査を行いました。



膝  
蓮華座

写真1 原遺跡第22次調査出土 土製仏像



膝  
蓮華座

写真2 (参考) 原遺跡第12次調査出土 土製仏像 (頭部欠損)

発掘調査では、寺院に関わる遺物がいくつか出土しました。写真1はそのうちのひとつである土製の仏像をかたどったものです。仏像は大半が失われており、全体像は分かりませんが、底面に花弁をかたどったものが見えます。これは仏の台座である蓮華座を表しています。その上の丸いふくらみは足を組んで座った状態を表しており、ちょうど左腿から膝の部分にあたります。このことから坐像であることが



写真3 原遺跡第22次調査全景 南東から撮影

わかります。また、中央に2本、膝のあたりを縦に走る浮き出た線が見えます。これは仏が身に着けている衣服の襷を表しているものと考えられます。中空になっている内側には、粘土を指で押し当てた痕がたくさんみられます。これは仏像の型に粘土を押し

し当てた際についたものです。外から見える場所ではないため、指の痕や粘土の継ぎ目がそのまま残っており、当時の製作方法を見ることができま

す。仏像は、懸仏(仏像または神像をかたどったもので、鏡から仏が浮かび上がる様子を表したものの。寺院や神社に奉納され、懸垂される)や、化仏(仏像の周りや光背に配置される小さな仏)の可能性が考えられます。

第22次調査では石敷きの道路跡(写真3)が山に向かって続いており、この土製仏像はここから見つかりました。そのほか、平成30年には原遺跡第27次調査として、西側隣地の本堂跡推定地中心部の発掘調査を行い、ここから土製仏像が見つかりました。当地近くで行った原遺跡第12次調査でも堂舎跡から土製の仏像(写真2)が出土していることから、道路跡で見つかった土製仏像は、本堂跡内で祀られた仏像群の一つであったと考えられます。

文化財課 中村 茂央